

～多治見に残る古い写真～

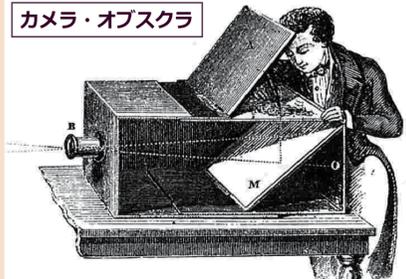
西浦家のガラス乾板

光や放射線などのエネルギーを利用して、被写体を視覚的に識別できる画像として記録すること、また記録したものが「写真」です。日本に写真の技術が伝わったのは江戸時代末のことで、嘉永元年（1848）には、長崎の商人が輸入したカメラなどの写真撮影道具一式が、薩摩藩主の島津斉彬に献上されました。このカメラで撮影された斉彬の銀板写真は、日本人が撮影した現存する写真の中で一番古いものといわれています。その後、写真の技術を学んだ人々が全国各地に写真館を開いたことで、写真が一般の人々にも広まっていきました。

写真のはじまり ～ピンホール現象と「カメラ・オブスクラ」～



暗い部屋の壁にあげた小さな穴から光を取り込むと、部屋の中に外の光景が逆さまにうつし出されるという「ピンホール現象」は古くから世界各地で知られていました。日本でも、江戸時代の書物の中に、この現象についての記載があります。この現象を装置化したのが【カメラ・オブスクラ】です。ラテン語で「暗い部屋」を意味し、カメラの語源となりました。



2021年（令和3）に【多治見西浦記念館】の蔵から発見された18枚の「ガラス乾板」。

写真は最初、光が形作る像を手書きで紙に写し取って作られていましたが、やがて金属の板などに塗布した薬剤を感光させて像を焼き付けることのできる感光材料が開発されました。そのひとつに「ガラス乾板」があります。

「ガラス乾板」は今でいうネガフィルムのようなもので、明暗が反転して写ります。取扱いが比較的簡単で画像の粒子も細かく、記録保存に向いているため、文化財の撮影などにも重宝されました。

～多治見で発見！～ ガラス乾板



発見されたガラス乾板（多治見西浦伝承会所蔵）

よみがえるガラス乾板 ～「西浦家別邸庭園」画像デジタル化～

多治見市図書館郷土資料室で【多治見西浦記念館】の蔵に保管されていたガラス乾板の画像をデジタル化しました。撮影された場所の大部分が「西浦家別邸庭園」であると思われますが、詳細な調査はこれからです。

「西浦家別邸庭園」は、江戸時代末から明治時代にかけて美濃焼や多治見の発展に貢献した西浦円治が後年を過ごした場所です。滝のある大きな池を中心にして奇岩を配した、趣のある庭園であったといわれています。この場所は現在、「御幸公園」となっています。



ガラス乾板に撮影されていた画像



多治見について調べるなら

郷土資料室へ

多治見市図書館郷土資料室

地域に関する資料や皆様から寄せられた文書や記録などを整理・保存しています。資料は、調べ学習や研究にもご利用いただけます。地域の歴史に関するご相談は、郷土資料室までどうぞ。皆様からの郷土資料のご寄贈や情報の提供などもお待ちしております。

〒507-0034 多治見市豊岡町 1-55 ヤマカまなびパーク 4階 JR 多治見駅より徒歩5分 TEL. 0572-23-3783

開 室：火～土曜日 10時～17時（日・月・祝日・年末年始は休室） ※図書館とは開室日・時間が異なりますのでご注意ください。